資料2

東京辰巳国際水泳場の後利用の方向性(案)について

１　経緯

○　東京辰巳国際水泳場については、平成２９年４月「新規恒久施設の施設運営計画」にある通り、近接地に整備予定である東京アクアティクスセンターと異なる機能を有するスポーツ施設としての活用を検討してきた。

○　昨年１１月３０日開催のスポーツ振興審議会においては、プール、アイスリンク、アリーナ（体育館）を有力な３案として報告し、有識者からの意見を聴取している。

○　今般、これら有識者の意見も参考としながら、都民ニーズやコスト等を比較し、都のスポーツ振興施策との整合性など以下の３つの視点を踏まえた検討を進め、後利用の方向性についてとりまとめた。

２　後利用に関する３つの視点に沿った検討

＜視点１＞

都のスポーツ振興施策との整合性（スポーツの見る機会やする機会の拡大に貢献）

⇒　施設を整備することによる効果について、有力な３案それぞれの１施設当たりの競技人口や競技団体登録者数を比較・分析するとともに、都民のスポーツ実施の機会拡大について実施可能な競技数の検証を行った。

＜視点２＞

スポーツを通じた地域経済、東京の活力創出へ貢献
（臨海スポーツゾーン全体の発展に向けたマルチスポーツエリアの充実）

⇒　近年整備が予定されている都立スポーツ施設の状況も踏まえ、施設が立地する臨海スポーツゾーンにおいて、実施可能なスポーツ競技数の充実の観点から検証を行った。

＜視点３＞

ライフサイクルコストの抑制

⇒　施設整備における初期費用や、想定される運営費について、長期間（２０年間）のライフサイクルコストを比較・分析するとともに、今後の運営の工夫によるさらなるコスト抑制の可能性についても検証を行った。

※詳細については別添「参考資料」を参照

３　後利用の方向性について

以上、３つの視点から比較・分析し、１施設当たりの競技人口が多く、実施可能な競技数が増加し、ライフサイクルコストの点でも優位性があることなどから、本後利用をアイスリンク（通年）として検討を進めていく。